

LETTER MAN

written by HADEYA

1

目を開けた。周囲は暗い。すぐ側に公園が見える。腕時計を見た——時刻は早朝だった。意識を取り戻したようだ.....慌てて持ち物を確認する。

バッグは無事だ。その中の〈機密書類〉も。記憶の端々が抜けているが、俺はその書類をどこに届けるか鮮明に覚えている。

俺の職業は機密書類を専門にする運び屋。名前は上条道久。年齢は.....思い出せない。

2

腹が減り、バーガーショップへ入った。店内でモーニングセットを食べながら昨日の事を思い出そうと努める。昨日——クライアントから仕事の依頼を受けた。今日の夕方17時までに確実に書類を届けて欲しいと言われ。書類をバッグに収め、現在に至る訳だ。

クライアントはこうも言った——用心しろ、と。この書類を狙っている者がいるそうだ。

バーガーをホットコーヒーで喉に流し込んだ。それにしても何故、俺は意識を失ったのだろう。そして俺はどうやって、この職業に就いたのか。記憶は断片しか思い出せない。思い出せないものは思い出せないのだ。

「さて」

呟きながら立ち上がる。仕事に戻ろう。内容は簡単だ。B社の重役に書類を届ける。それだけ、だ。それだけで大金が手に入る。

食べ終えた残骸をゴミ箱に捨て、トレイを所定の位置に戻した。腕時計の時刻は6時22分を告げている。さあ、出発だ。

店を出た時だった。覆面姿の連中が前方に現れたのは。後方を振り返る。背後からも覆面姿の連中が接近して来る。

クライアントは言った——用心しろ、と。その言葉を思い出し、俺は走った。

覆面姿の連中が追って来る。走りながら考えた。連中の目的が何か。目的は一つ。機密書類に違いない。一体、この書類は何なのか.....。

考えを振り払った。俺の仕事は書類を運ぶ事であって、その中身を詮索する事ではないからだ。

3

連中を振り切り、駐車場に着いた。キーの開いている車があった。迷わず、俺はその車に乗ると慣れた手付きでエンジンを直結し、車を走らせた。不思議だった。自分がどこで、そんな技術を身に付けたかが思い出せないからだ。

車を運転する。他県のB社に向け。

運転しながら考えた。連中が何者か。そして自分が何者か。連中は俺が持っている機密書類を狙っている。そして俺は自分の事が思い出せないと来ている。

ピンと来る。機密書類に俺の過去が記述されているとしたら……。

「まさか」

運転しながら呟いた。そんな事、ある訳がない。しかし気になる事は気になる。一か八か書類の中身を見ってみるか？

銃声がして後部座席の窓が粉々に碎け散った。

「ひっ！」

叫びながら咄嗟に頭を下げた。連中に見付かったのだ。

4

アクセルを目一杯、踏む。一般道を猛スピードで疾駆する。

前方を車両が塞ぐ。ブレーキを踏み、車を急停車させた。後方も車体が塞いだ。バッグを持って車から出た。連中は俺にマシンガンを向けている。

諦めた。バッグを足元に落とし、立ったまま両手を挙げた。

こうして俺は捕らわれの身となった。

5

「お前、何者だ？」

捜査官が尋ねた。今、俺は取調室で事情聴取を受けている。逆に俺が聞きたかった。俺は何者か、と。

「思い出せない——」

俺は答えた。事実を。

「——今朝、意識を失って、記憶の端々が抜けてるんだ」

「何故、意識を失った？」

「思い出せないと言っている」

「お前が持っていた書類を見た」

「それで？」

「ただの白紙だった」

話が見えない。クライアントは俺に白紙の機密書類を渡したのか。何の為に？ 捜査官は続けた。

「お前は白紙を運んでいた。そして記憶の端々がないと言っている」

「事実だ」

「それが事実なら——」

捜査官は告げた。冷淡な口調で。

「——お前は用済みと言う事になるな」

「.....俺をどうするつもりだ？」

「それは、お前の出方次第だ」

「と、言うと？」

捜査官は書類をテーブルに置いた。俺が持っていた機密書類を。

捜査官は言った。

「この書類を予定通り、B社に届けろ」

「泳がせるつもりだろうが、断る」

「断って良いのか？」

「弁護士を呼べ。俺には権利がある筈だ」

睨み合い——先に折れたのは捜査官だった。捜査官は立ち上がり、壁際へ向けて歩いた。

「ここからは手荒な方法で行かせて貰う」

そう言って、捜査官は室内の照明を落とした。

6

再び照明が灯った。背後から頭を掴まれ、テーブルに叩き付けられた。いつの間に背後に人がいたのか。

「待て！ 待ってくれ！」

サングラスを着用した黒服の男が接近する。男は容赦なく、殴った。倒れた俺の腹部を蹴り上げる。男は懐のポケットからメリケンサックを出し、拳に装着した。

「言う通りにする！ 書類を届ける！」

叫んだ。

「もう必要ない」

そう言って、男は俺にボディブローを浴びせ——

7

車から道路に落とされた。バッグと共に。周囲は暗い。すぐ側に公園が見える。腕時計を見る——時刻は早朝だった。

意識を失った。失いながら夢を見る。

夢——悪夢だった。俺はサングラスの男に抑えられ、別のサングラスの男にピストルのような装置を突き付けられている。

「この装置は——」

装置を手にした男が言った。

「記憶を消す装置だ。お前の記憶を消してやる」

俺は……虫の息だった。やがて男が装置の引き金を引いた。同時に脳内を電気ショックが突き抜け――

俺は屋上にいた。快晴の空を眺めていると背後からクライアントが歩いて来た。クライアントは告げた。

「仕事の依頼がある」

「……私はミッションを失敗しました」

「関係ない。君に依頼したいんだ。君にしか出来ない仕事なんだ」

そう言って、クライアントはジェラルミン・ケースを差し出した。

「このケースの中に機密書類が入っている。B社に届けて欲しい」

「かしこまりました」

俺はケースを開け、中に入っている〈機密〉の捺印がされた封筒を手にとった。

……意識を取り戻したようだ。慌てて、自分の持ち物を確認する。

バッグは無事だ。その中の〈機密書類〉も。記憶の端々が抜け落ちているが、俺はその書類をどこに届けるかを鮮明に覚えている。

俺の職業は機密書類を専門にする運び屋。名前は上条道久。年齢は……思い出せない。

8

前にも、この光景を見た事がある。本能から俺は悟った。俺の仕事は書類を運ぶ事。一体、書類は何なのか……

。

バッグを見た。機密書類の中身が読みたいと言う強い衝動があった。衝動に負け、俺はバッグの中の機密書類の封を開けた。書類にはビッシリと文章が記述されていた。俺は文章を読んだ。

9

件名: 次の会議の議題

お世話になります、島崎です。この度は弊社が起こした不祥事を重く受け止めています。二度と失態を演じない事をお約束いたします。

本題に入りましょう。次の会議の議題は〈選抜〉です。現在、進行中のプロジェクト実行の為、誰かが選ばれる必要があります。そこで弊社はあるテストを敢行しているのです。

テストの内容は機密書類の運搬。運搬時には弊社が派遣した対立組織が書類を追うよう設定されています。テストの目的は見てはならない機密書類を盗み見る事であり、言うなれば知能テストです。このテストに合格した者がプロジェクトの指揮に当たります。

現状、最有力の候補は〈上条道久〉と言う機密書類を専門に請け負う運び屋であり、彼が合格した暁には、このメールを読む事でしょう。

以下、上条君へ。このメールを読んだら、電話をしなさい。番号は―――

ポケットからスマホを出し、メールに書かれた番号をダイヤルした。二度の発呼音の後、相手が通話に応じた。「おめでとう、上条君。テスト合格だ」

10

真相を知った。構図はこうだ。この世界は……今、俺がいる世界はコンピュータの内部なのだ。俺の正体はメール送信プロトコル。てっきり自分が人間だとばかり思っていたが、実際には違う。俺は開発言語だ。プロジェクトの指揮官に任命された。何のプロジェクトか。

鉄壁なるセキュリティの確立。その為にファイヤーウォールを強化する。それがプロジェクトの概要だ。プロジェクト・リーダーは、俺。そしてセキュリティを強化するパソコンは他ならぬ〈あなた〉のパソコンだ。このプロジェクトには巨費が投じられている。失敗する訳には行かない……。

11

リムジンが迎えに来た。そのままB社へ向かう。

指揮官に任命され、一日が過ぎた。プロジェクトが始動し、さらに一日が過ぎた。一週間が過ぎ、一カ月が過ぎた。時間が飛ぶように過ぎて行く。

あなたのパソコンに高度なセキュリティが実現する。そのセキュリティで、あなたはネットワーク社会を飛び回る。こうして一件落着と思えた。しかし事態は思わぬ方向へ転ぶ事になる。

12

車を運転していた。一通の機密書類を送信先に届ける為に。その時、大地が揺れた。

「デ、デカいぞ……」

車を停車させた。激しく揺れた。目の前のビルが左右に揺れている。世界が不安定に……システムが不安定になっている。

轟音と共にビルが倒壊した。次々とビルが倒壊して行く。

今、リアルタイムで〈何か〉が起きている。ふと助手席のバッグが目にとまった。機密書類が入ったバッグを。異常を察知した俺は……ルールに反し、機密書類を手にとった。中の文章を読む。そこには、こう書かれていた。

件名:新しいパソコンを買うの!

オッハー。元気してる??? 今日、新しいパソコンを買うの!!! 今まで使ってたパソコンは初期化して買い取り業者に売るんだ。準備バッチリ!!! さあ、パソコンの初期化を始めようかな♪ それじゃあ、また後で!!!

手にしてる機密書類を落とした。どう言う事か悟った。パソコンの〈初期化〉が始まったのだ。そして世界が不安定になった。次に来るのは――

下半身を見た。足が徐々に消えて行っている。

「そんな……」

一体、俺は何の為にセキュリティを強化したのか。一体、俺は――

そこで世界が瞬時に消えた。世界は闇に閉ざされた。(了)

キリミハデヤ

hadeyakirimi@gmail.com

81-080-9832-0574

モリカワ ケンタロウ 口座番号

三井住友銀行(店番号232) 普通口座 口座番号:7342872